

りんご音楽祭会場の
アルプス公園



子どももお年寄りも好きな「アルプス公園」
りんご音楽祭により年1回ココが松本で一番熱くなる!



かわいい動物もいるので小休憩に
動物園を回るのがおすすめ

ココがりんご音楽祭
実行委員会本拠地!



学生時代に仲間と借り始めた「互レコード」
今では音楽イベントを開催している



今までの道のりを話す
代表の古川陽介さんと初期からのスタッフ吉崎愛実さん

りんご音楽祭 2017

9.23 SAT 24 SUN アルプス公園

+ 巻頭特集 +

「りんご音楽祭」 その魅力と数奇な道のり

毎年9月下旬、アルプス公園がフェスの舞台に変わります。全国各地のアーティストが集まってステージを披露する「りんご音楽祭」。音楽をこよなく愛する1人の若者の思い付きから始まったこのイベントは、数奇な道のりをたどりつつ全国的な注目を集めるまでに育っていきました。今回はその発起人で実行委員会代表の古川陽介さんにインタビュー。込めた思いや初期の試練、りんご音楽祭ならではの魅力などを語ってもらいます。

ボランティアスタッフ募集中!
WWW.RINGOFES.INFO

りんご音楽祭には、他のフェスとは一線を画す特長があります。まず会場が街中から近いことが珍しいパターン。第1回からスタッフとして加わっている吉崎愛実さんは「フェスと言えばアウトドア装備が必須という雰囲気もあるけど、うちはヒールでさえ行けます。音楽が好きで自律して遊べる層のお客さんが来てくれるので、他のフェスのようにゴミが散らばってたりもしないんです」と力説。出演アーティスト数も多く、「目玉」となるヘッドライナーもあえて据えません。

さらに、被災地在住者を毎年招待しているばかりか、15歳以下と60歳以上は無料です。「花火大会や街のお祭りに誘うような感じで中学生のデートなどにも使ってほしい」と古川さん。そう思う根底には、強い「松本への愛着」があります。自身は山梨県出身ですが、15年前の信大入学時から松本に定住するようになり、「松本は全国的に見てもかなりイケてる街なのに、若い子が楽しめるエンタメが少ないんです。そんな中『りんご音楽祭』は若い子も日常の延長で楽しめる場なので、来てもらえれば松本の街との精神的な一体感が明らかに思えます」。今年9月23日(土)24日(日)の2日間。日常に音楽が染み込む独特な空間に、気軽に足を運んでみませんか。

松本の街なみ自体が売り 日常の延長で楽しむ空間

が7月下旬に急逝。りんご音楽祭が、ユニットを組むタブラ奏者のU-zhaanが「U-zhaan x rei harakami」として出演する唯一のフェスとなりました。スチャダラパーや七尾旅人、仙台在住のGAGLEなど、その年を象徴するアーティストが一堂に会し、忘れられない特別な2日間となりました。

翌12年にBRAHMAN、13年にUA、14年にハナレグミ、15年に水曜日のカンパネラ、16年に加山雄三率いるTHE KING ALL STARなど、毎年約150組前後のアーティストが出演。前回は2日間でのべ6800人がアルプス公園に訪れました。古川さんは「去年はやりたかったことがほぼ完成して、8年前に描いた夢の景色が見られました」と振り返ります。

大震災の年に訪れた転機 有名アーティストも出演

2回目を開催に持ち込むと、手応えが得られました。「1年目は風呂敷を広げすぎてダメだったけど、2年目はそれほど広げずに成り立った感じがしました。これなら続けられるなど」。苦難をともにしたスタッフ同士の団結力も強まり、現在もその仲間たちはさまざまな側面から運営に関わっています。

そして2011年、転機が訪れました。東日本大震災の影響で各地のフェスが軒並み取りやめになったり、縮小していました。そしてりんご音楽祭の1週間前に開催予定だったフェスの1つも台風で中止という珍しい事態になりました。さらに、そのフェスとりんご音楽祭に出演予定だった有名なテクノミュージシャンのGei harakami

思い立ってすぐに実現も その後は「試練」の日々

2009年4月。普段から訪れるアルプス公園に、お弁当を持って遊びに行ったときのことでした。「公園がここでフェスをやってほしい」と言っているような気が勝手にしたんです。思い立ってすぐ実行に移すと、わずか5カ月後には開催にこぎ着けました。「フェスを開くことがどれだけ大変かを知らずにノリでやってしまっただけ、何もかも大変すぎました」と古川さん。運営費などで多額の負債を背負うことになりました。

そこから1年間は筆舌に尽くしがたいほどの日々でした。「元旦以外の364日、1日20時間アルバイトをして返しました。人生であれ以上の試練はないと思いません」。でも、それで心を折らないのが古川さん。「自分の性格上、始めたことを辞めるという選択肢が基本的にはないんです。それに、明らかに大変だとわかっていながら協力してくれたみんなに恩返しをするためには、結果を出して応えるしかない」と。仕事以外のわずかな時間を縫って、第2回の準備をほぼ1人で進めていきました。アーティストの出演交渉や宣伝、機材やテントの調達などなど。「10人分くらいの仕事を1人でやりました」。